

統語的主語の義務化：英語史における非人称構文の衰退と非対格構文の出現

大澤, ふよう / OSAWA, Fuyo

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

科学研究費助成事業 研究成果報告書

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

6

(発行年 / Year)

2015-06

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 9 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520556

研究課題名(和文) 統語的主語の義務化：英語史における非人称構文の衰退と非対格構文の出現

研究課題名(英文) Syntactic subject requirement: the demise of impersonal constructions and the rise of unaccusative constructions

研究代表者

大澤 ふよう (OSAWA, Fuyo)

法政大学・文学部・教授

研究者番号：10194127

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、「主語」は古い時代の英語では義務的存在ではなく、意味的に必要とされる場合のみ統語的に具現化されていたことを証明し、現代英語のように常に音声を伴って統語的に具現化されるようになった経緯を明らかにした。

古い時代において、英語はいわゆる内容語と言われる名詞や動詞、形容詞などの語彙的要素から出来ていて、機能範疇は存在せず意味的に必要とされる文法的要素のみが具現化される語彙・意味優位型の言語であった。そして主語の存在しない非人称構文が使用されていた。時代を経るにつれて統語構造優位な言語に変化していき、意味的に必要性がなくても常に「主語」が節構造の中に存在する言語に変化した。

研究成果の概要(英文)：This research has aimed to show that the notion of subject is not universal. In Old English, The presence of impersonal construction with no subject is a decisive piece of evidence. This is because Old English was a lexical-thematic language which consists of content words with no functional categories. Thematic relations between lexical items played a crucial role in determining the clause structure. In current English, 'subject' is a syntactic device which was introduced late in the historical development of language to satisfy structural requirements. In Present-day English, subject has become obligatory due to fully-developed functional systems. The subject requirement is now clear due to the facts of mandatory presence of subjects, the presence of expletive subjects without semantic content.

研究分野：人文学 humanities

キーワード：統語的主語 非人称構文 語彙・意味優位型 機能範疇 非対格構文

1. 研究開始当初の背景

「主語」は、言語にとっては普遍的存在であり、a priori な自明の存在として考えられがちである。しかし「主語」には、様々な概念が含まれ、時として曖昧なまま使われている。

主語とは、格、すなわち主格で表示されるものとする形態的な捉え方もあれば、生成文法のように、時制(Tense)の投射である TP の指定部に起こる要素というように、意味を極力排除して構造的に捉える分析もある(Chomsky 2000, 2001)。また、形態 統語論的観点からは、述部動詞と人称・数などで一致するものと捉えられ、意味論的な観点からは主語とは、述部が記述する動作や行為を行う「動作主」とであると言われる。この観点は生成文法の Larson (1988) Chomsky (1995, 2001)などで、vp Shell を使った分析にも見られる。時には、論理学に於ける、述語に対しての「主語・主題」と同様に考える場合もある。しかしどの観点からの定義であっても、必要十分とは言えず、反例が必ず存在する。

生成文法では T の位置に EPP(Extended Projection Principle) 素性を仮定し、この EPP 素性は TP の指定部に顕在的な要素を義務的に要求するとする。そこで、動詞句(v*P)の外項(external argument)がこの位置に繰り上がる、これが主語であるとされる。もし、動詞が外項を持たない場合は、虚辞(expletive)の it や there が指定部に挿入されることで、EPP 素性を満たすとされる。しかし、この EPP 素性がなぜ顕在的な要素を必要とするのかについての説明はない。Chomsky (2000, 2001) では、この素性は解釈不可能なものであり、インターフェイスに行く前の段階で照合を行い、削除される必要があるという説明が一応されているが、そもそも EPP 素性の内容が不明であり、主語がなぜ統語構造の中に存在せねばならないかは実は説明されていないのである。どのアプローチも「主語」の本質の一部しか捉えられていない。

本研究は、このような背景のもと、「主語」の本質に迫るべく、歴史的経緯から主語の性質を明らかにすることを目標として出発した。

2. 研究の目的

本研究は、「主語」は古い時代の英語では義務的存在ではなく、他の項と同じステータスを持つ項に過ぎなかったが、やがて統語構造における義務的な存在になっていった経緯を明らかにする事を目指す。非人称構文の衰退と非対格動詞構文の出現には密接な関係があり、背景には英語の言語としての本質の変遷があることを論ずる。それと同時に、通言語的視点からも、「主語とは何か」とい

うことを考察し、「主語」の本質にせまることをめざした。

古英語のような lexical-thematic (語彙・意味優位型)な言語においては、「主語」は普遍的な存在でなく、節構造は述部(動詞、あるいは形容詞)と、述部が描く出来事や行為を完遂させるのに、意味的に必要とされる要素、すなわち項からのみ成る、と主張する。

「主語」は現代英語のような特別な項ではない。その具体的な表れが、非人称構文であったと主張する。そして、英語が機能範疇の発達した統語構造優位な言語(これは伝統的な用語を使うと分析的言語、analytic language である)へと変化していく中で、「主語なし」の非人称構文は衰退し、統語的主語が義務的な存在となっていくことを論ずる。

論点を整理すると以下のことを明らかにすることを目的とした。

(1) 英語において主語は統語構造上の特別な必要物ではなかった。一般の項と同じ存在であった。

(2) 主語は現代英語においては統語的に義務的な存在である。すなわち特別な項である。

(3) 主語が英語の中で義務的存在になったのは、統語構造の中で TP が存在し、その指定部を満たす必要が出てきたことが原因である。統語的主語の存在は機能範疇に依存するものである。

(4) したがって主語は言語にとって普遍的に義務的存在ではない。

これらのことを、古英語の非人称構文を中心として、非対格性にも言及しながら論証することを目指した。非人称構文は、Jespersen (1909-49)や van der Gaaf (1904)などで、再分析を用いて論じられ、生成文法では Lightfoot(1979)以降 Fischer and van der Leek (1983, 1987)、それ以外のアプローチでは Ogura(1986)、Allen (1986)等多くの学者が取り上げてきた。本研究では、文中の名詞句とは関わりなく述部動詞が3人称単数であり、主格名詞が存在しない構文をさすという非人称構文の定義を採用した。

重要なことは、古英語では「主語なし節」が可能であったことである。この「主語なし」という状態をどのように分析するかが問題となるが、様々な理論的可能性を検討しながら、本研究では、「主語なし」ではなくはじめから外項が投射されていない節構造であったと主張する。非人称構文とは、外項を投射しない、つまり、意味的に「行為者」役割を担うべき項を持たない節である。非人称動詞は、sniwan など天候動詞、hyngrian など生理現象の動詞、感情や非意図的精神的表現 byncan などや、偶然事態が起こる gebyrian などである(cf. Gaaf 1904, McCawley 1976)。もし主語が「行為者」役割を持ち、統語的には主語、形態的には主格で表示されるものとする、そもそも非人称動詞は意味的に「行為者」役割を担うべき項を持たない。その場合必要な項と動詞だけで節が構成され、NP

がゼロで動詞と副詞だけという文すら存在するのである。現代英語のように機能範疇 T が存在する言語なら、何らかの顕在的要素が繰り上がる。これが実は非対格構文にもなってくるのだが、または虚辞を挿入したりするが、古英語では機能範疇は限定的にしか発達していなかったと考えられる根拠があり (cf. Gelderen 1993, 2000, 2004; Osawa 2003, 2007, 2009)、繰り上がる必要はない。そこから古い時代の英語や言語では、節は、述部動詞と、述部動詞が描く出来事や行為・状況を完遂させるのに意味的に必要とされる項のみからなり、その項はそれぞれ、意味役割を持ち、その意味役割にふさわしい形態格をもっていったということが言える。これが、言語が語彙・意味優位型であるということの内容である。「非対格構文」も全く同じ原理で説明することができる。現代英語では、意図的動作主が存在せず外項がなく、目的語が、空の主語位置 (TP の Spec) に繰り上がるとされるが、語彙・意味優位型の古英語では繰り上がる必要はない。古英語では非対格動詞というクラスを立てることは不要であり、実際、非対格動詞は古英語では非人称動詞に包摂される。しかし、形態格の衰退とともに、別の手段としての機能範疇が出現し、格の付与 (照合) も意味と切り離されて統語的になされるようになり、「主語」が義務的な存在となっていく。英語は統語構造優位の言語になっていったのであると主張する。

3. 研究の方法

本研究は、研究方法としては生成文法の理論を活用する。現代英語における統語的に義務的な主語の存在を機能範疇 TP の EPP 素性によって要求されるとする、生成文法による説明がもっとも明快であるからである。しかし、歴史的な変化を分析するには、生成文法以外の先行研究の成果も援用する必要がある。また主語の存在が、普遍的かどうかを検証するためには英語以外の言語についての先行研究にも言及する必要がある。従って、伝統文法、関係文法、言語類型論などの優れた先行研究の成果を取り入れた。つまり、共時と通時の手法を両方取り入れて研究を行う。

また、歴史のデータを扱う際には、可能な場合には電子コーパスを活用することとした。

4. 研究成果

2012年度は、先行研究のまとめと評価に重点を置いた。非人称構文、非対格動詞については、様々なアプローチによる先行研究が多数存在する。非人称構文に関しては、先に挙げたように伝統文法では、Jespersen (1909-49) や van der Gaaf (1904)、生成文法でも多くの研究が存在するが、研究者によっ

て指す範囲がまちまちであり、意味的な基準、形態的な基準と統語的な基準が混同されて使われている場合もある。「主語」とは統語的なものであるという観点から、先行研究を整理し直し、評価をした。特に非人称構文についての先行研究における「主語」の分析の不十分性を総括した。伝統文法では、Jespersen (1909-49) や van der Gaaf (1904)、生成文法でも多くの研究が存在するが、研究者によって指す範囲がまちまちであり、意味的な基準と統語的な基準が混同されて使われている場合があり、それらの混乱と曖昧性を指摘することができた。そしてその点を明らかにしないままの分析には問題があることを明快に示すことができた。そして現代英語における「主語」とは、時制 (Tense) の投射である TP の指定部に起こる統語的なものであるということをもまずはっきりさせた。その上で、「主語」が存在しない非人称構文を、従来の生成文法のように、「主語」が脱落した構文、あるいは null subject があるとするように分析するのではなく、そもそも節構造に主語位置の投射が存在していなかったという分析が可能であることを、英語以外のさらに古い印欧語のサンスクリット語などのも援用して示すことができた。その成果として、非人称構文と主語が普遍的はないことについての研究発表を、2012年9月に慶応大学で開催された SHELL2012 (The 4th International Conference of the Society of Historical English Language and Linguistics) において Impersonal Constructions and the Non-universality of Subject という表題で行った。また、「主語」が節構造に義務的に投射されるようになったのは言語の歴史の中では比較的新しいことであることを、古英語だけではなく、他の印欧語、特にサンスクリット語文法を示すことで証明する研究発表を、10月、ベルギーのアントワープ大学で開催された第6回 Generative Initiatives in Syntactic Theory: Subjects Workshop において、Subject: Where are you from? という表題で行った。さらに、こうした主語をめぐる英語の変化、つまり義務的ではなかった主語が統語構造の中で次第に義務的になっていく過程を歴史言語学で言われる「文法化」現象の1つとして捉えられることを、他の現象とも合わせて論じた研究を、8月、スイスのチューリッヒ大学で開催された第17回 International Conference on English Historical Linguistics において、The Syntactic Nature of Grammaticalization in English という表題のもとに行った。

さらに、「主語」が脱落したり、null subject ではなくて、そもそも節構造に存在していない構文として非人称構文と受動態構文を取り上げ、現代英語の受動態構文のように、目的語が主語位置に格上げされて生成されるのではなくて、そのまま、目的語としての格

をつけたまま存在している非人称受動態構文の存在が、主語が普遍的存在ではなかった事の強力な証拠であるとの考察をまとめた論文 Impersonal and Passive Constructions from a Viewpoint of Functional Category Emergence を出版することができた。

非対格構文に関しては、現代語の先行研究はあるものの、歴史的な研究は特に英語においてはまだ少ないが、現代語を中心に関係文法による先行研究はかなりまとめることができた。

2013年度は、仮説を設定し、それを論文という形である程度まとめることができた。すなわち非人称構文とは「主語なし」構文で規範的な構造からの逸脱であるという分析を否定し、主語が入るべき「外項」がはじめから投射されていない節構造であったと主張した。非人称構文とは、意図を持つ行為者が存在しない状況を描く構文であり、従って主語として実現されるべき項は存在しない。現代英語ではそれでも「主語」が必ず存在するのは統語的にその存在を必要とする機能範疇の要請に基づくものである。古英語は、述部の記述に意味的に必要とされる項から節が構成され、それぞれが意味役割を持ち、それに合致した形態格を持っていた。その格体系の崩壊が英語において起こったことが英語の言語の本質を変えたと主張した。

また、非人称構文を分析するにあたり、他動詞、他動詞性とは何かという根本的なところから見直しを行い、他動詞構文の本質が古い時代の英語と現代英語とでは違って来たことを明らかにした。その背景のもとで非人称構文を分析すると、この構文は決して規範からの逸脱ではないことがさらに裏付けられた。また、見落とされがちであるが格体系がさらに大きな背景としてあることを見た。ミニマリスト・プログラムで言われる解釈不可能な格は古英語には存在せず、言うならば全て解釈可能な格しか存在しなかったのである。この格体系が崩れたことから他動詞性を持たない、あるいは他動詞性が低い、他動詞構文が成立可能になったことを見た。歴史言語学での重要なトピックの1つである、「文法化」現象の本質は上で書いたように、機能範疇の出現により統語的な要請の強化という側面があることを提案することができた。

言語変化、特に英語に著しい文法化現象についてのこの機能範疇の出現という側面で見えることをまとめた研究を2013年7月、中国青華大学で開催された IAUPE (The International Association of University Professors of English 2013)で、Free Riders in Grammaticalization という表題のもとで発表した。同年8月にはノルウェーのオスロ大学で開催された第21回 International Conference on Historical Linguistics において、The Grammaticalization of an Inflectional

Ending: Towards a Formal Theory of Grammaticalization という表題のもとで発表した。さらに、動詞の目的語(内項)と形態格、とくに属格名詞との関係が文法化現象における重要な鍵になっていることを論じた研究を、9月アメリカ合衆国プリガム・ヤング大学において開催された SHEL 8,(The 8th Studies in the History of the English Language)で The Emergence of Group Genitives: the Nature of -es Ending in Complex Possessive Phrases という表題のもとで発表した。

他動詞性と格の問題を正面から取り上げ、他動詞性を持たない他動詞構文が成立可能になった背景に、意味的格体系の崩壊、それは形態格の衰退でもあるのだが、あることを論じた論文 The Loss of Lexical Case in the History of English を、Cambridge Scholarship Publishing から出版された単行本 Periphrasis, Replacement and Renewal: Studies in English Historical Linguistics の中に掲載することができた。また前年に行った非人称構文と主語が普遍的はないことについての SHEL2012 での研究発表を、さらに深化させた論文 Impersonal Constructions and the Non-universality of Subject を、Peter Lang 社から出版された単行本 The Phases of the History of English: Selection of Papers read at Shell 2012 に掲載することができた。

2014年度は、それまでに得られた評価や批判点を検討しそれらに答えて仮説の精緻化を目指すと共に、成果を発信する年とした。古英語において主語が義務的に存在していなかったということを証明するためには、現代英語との対比で主語が欠落している構文を取り上げるだけでは不十分であるという批判に答えるために、主語の存在は機能範疇の要請に基づくものであることから、それらが存在していたら、必ずそれに伴って起こることが予測される統語現象を取り上げ、それらが欠如していることが英語史研究者の間で広く認められている場合には有効な証拠となるということから論を展開した。主語が欠如しているということは、主語を必要とする機能範疇の不在であるという仮説の証明のために様々な統語現象を論じた。主語が欠如しているという問題は、節構造がどのような原理のもとに構成されているかという根本的な問題に立ち入らない限り解決はできないとの観点に達した。そもそも古英語において統語構造はいかに構成されるのかという点を論じ、非対格構文の構成についても、一定の結論を得ることができ、従来の仮説の正しさを証明し、さらに強化することができた。

それは、古い時代の英語や言語は語彙・意味優位型であり、節は、述部動詞と、述部動詞が描く出来事や行為・状況を完遂させるのに意味的に必要とされる項のみからなり、そ

の項はそれぞれ、意味役割を持ち、その意味役割にふさわしい形態格をもっていた。従って、主語が必要とされない述部の意味内容の場合には、主語の項は最初から節構造に投射されていない。これが非人称構文の本質である。

さらに同じことは非対格動詞とされる動詞に関しても当てはまることを見た。古英語では非対格動詞というクラスを立てることは不要であり、実際、非対格動詞は古英語では非人称動詞に包摂されることを見た。

しかし全体的な統語構造の構築の仕方が古英語から現代英語にかけては大きく変化し、意味役割とは無関係に、主語が存在できるようになった。形態格の衰退とともに、別の手段としての機能範疇が出現し、格の付与(照合)も意味と切り離されて統語的になされるようになり、「主語」が義務的な存在となっていた。英語は統語構造優位の言語になっていたのである。すなわち、「Burzioの一般化(Burzio's generalization)」として知られる、「主語に意味役割を付与できる動詞だけが、目的語に対格を付与できる」事態が可能になったのである。

節と名詞句の並行性という生成文法では広く受け入れられてい前提に立って節構造だけでなく、句構造の構成についても古英語においては同じように機能範疇が不在だったことを論じ、古英語が語彙的範疇のみから構成される「語彙・意味優位型」言語であることを証明し、その主張を強固なものにした。

上のような観点から 2014年6月に日本大学で開催された近代英語協会第31回大会で、古英語において統語構造はいかに構成されるのか、という点を論じたシンポジウム「統語構造と線形順序」を近代英語協会の依頼により企画・構成し、その中で「英語史における名詞句内語順の変化」と題する研究発表を行った。同年8月にはスイスのチューリッヒ大学で開催された第3回 ISLE (Conference of the International Society for the Linguistics of English)において、「文法化」現象の本質を機能範疇の出現による統語的な要請の強化である、つまり「文法化」の本質は統語的なものであるということ論じた研究を、Contributors and Free Riders in Grammaticalization という表題のもとに発表した。

主語が入るべき「外項」が初めから投射されない構文として古英語時代に存在した主格名詞が存在しない非人称受動態構文について論じ、この構文の存在が「他動詞性」とは何か、という大きな問題への解決の糸口となり、さらに「対格性」「非対格性」とは何かという問題への糸口となることをかなり詳しく論じた研究を、同年9月にイタリアのパビア大学で開催された第6回 Syntax of the World's Language: Voice Systems in Diachrony という学会で、Passives and Impersonals という表題のもとに発表した。

名詞句と節の並行性の問題を論じ、同じような機能範疇の出現が見られることを論じた論文 Why has an Article System Emerged? : The Shift from Parataxis to Hierarchy を Peter Lang 社から出版された単行本 Studies in Middle English: Words, Forms, Senses and Texts に掲載することができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4 件)

大澤ふよう 論文名 Why has an Article System Emerged? : The Shift from Parataxis to Hierarchy, 掲載書名 Studies in Middle English: Words, Forms, Senses and Texts, Peter Lang 社発行の単行本、査読有、2014年、285 - 299 .

大澤ふよう 論文名 The Loss of Lexical Case in the History of English を、Cambridge Scholarship Publishing, 掲載書名 Periphrasis, Replacement and Renewal: Studies in English Historical Linguistics, Cambridge Scholarship Publishing 社発行の単行本、査読有、2013年、167 - 186 .

大澤ふよう 論文名 Impersonal Constructions and the Non-universality of Subject, 掲載書名 The Phases of the History of English: Selection of Papers read at Shell 2012, Peter Lang 社発行の単行本、査読有、2013年、211 - 228 .

大澤ふよう 論文名 Impersonal and Passive Constructions from a Viewpoint of Functional Category Emergence, 掲載書名 Recording English, Researching English, Transforming English, Peter Lang 社発行の単行本、査読有、2013年、225 - 241 .

[学会発表](計 10 件)

大澤ふよう 発表題名 Passives and Impersonals

学会名 Syntax of the World's Language: Voice Systems in Diachrony

発表年月日 2014年9月11日

発表場所 パビア(イタリア) パビア大学

大澤ふよう 発表題名 Contributors and Free Riders in Grammaticalization

学会名 The 3rd Conference of the International Society for the Linguistics of English

発表年月日 2014年8月25日

発表場所 チューリッヒ(スイス) チューリッヒ大学

大澤ふよう 発表題名 英語史における
名詞句内語順の変化(シンポジウム「統語構
造と線形順序」において)
学会名 近代英語協会第31回大会
発表年月日 2014年6月28日
発表場所 (東京都・杉並区) 日本大学

大澤ふよう 発表題名 The Emergence of
Group Genitives: the Nature of -es Ending
in Complex Possessive Phrases
学会名 The 8th Studies in the History of
the English Language
発表年月日 2013年9月28日
発表場所 プロボ(アメリカ合衆国) ブリ
ガム・ヤング大学

大澤ふよう 発表題名 The
Grammaticalization of an Inflectional
Ending: Towards a Formal Theory of
Grammaticalization
学会名 第21回 International Conference
on Historical Linguistics
発表年月日 2013年8月9日
発表場所 オスロ (ノルウェー) オスロ
大学

大澤ふよう 発表題名 Free Riders in
Grammaticalization
学会名 The International Association of
University Professors of English 2013
発表年月日 2013年7月16日
発表場所 北京 (中華人民共和国) 青華大
学

大澤ふよう 発表題名 主語、あるいは主
語性について
学会名 津田塾大学言語文化研究所第27
回研究会
発表年月日 2012年12月22日
発表場所 (東京都・小平市) 津田塾大学

大澤ふよう 発表題名 Subject: Where
are you from?
学会名 第6回 Generative Initiatives in
Syntactic Theory: Subjects Workshop
発表年月日 2012年10月19日
発表場所 ゲント (ベルギー) ゲント大
学

大澤ふよう 発表題名 Impersonal
Constructions and the Non-universality of
Subject
学会名 The 4th International Conference
of the Society of Historical English
Language and Linguistics 2012
発表年月日 2012年9月3日
発表場所 (東京都・港区) 慶応大学

大澤ふよう 発表題名 The Syntactic
Nature of Grammaticalization in English、
学会名 第17回 International
Conference on English Historical
Linguistics
発表年月日 2012年8月25日
発表場所 チューリッヒ (スイス) チュー
リッヒ大学

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大澤ふよう (OSAWA, Fuyo)
法政大学・文学部・教授

研究者番号: 10194127